

東南アジアのポピュラーカルチャー : アイデンティティ・国家・グローバル化

著者	福岡 まどか
雑誌名	民博通信
巻	161
ページ	24-24
発行年	2018-06-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009108

東南アジアの ポピュラーカルチャー

—アイデンティティ・国家・グローバル化

福岡まどか・福岡正太 編著
スタイルノート/2018年/本体 4,000円+税

本書は、東南アジアの人々が文化に関わる多様な価値観とどのように向き合っているのか、文化実践を通して自分をいかなる存在として位置づけていくのか、という問題を考察した論文集である。ポピュラーカルチャーに焦点を当て、今日のグローバルな資本主義を生きる人々が日常的に経験する文化の考察を目指して組織された共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー—アイデンティティ・国家・グローバル化」(代表：福岡まどか、2013-2016年度)の成果である。

ここでの文化は、芸術やメディア表象などに代表される文化表現のジャンルに限定されるものではない。人々が日常的に経験する文化は、「商品化」された目に見えやすいものもあるが、一方で必ずしも実体としてとらえられない人々の語りや実践、また価値体系として広まっていくものもある。したがって本書の中ではポピュラーカルチャーを特定のジャンルとしてではなく、文化の生産・流通・消費のあり方としてとらえることに主眼を置いた。その生産・流通・消費のプロセスは、社会の中で人々が知識・信仰・道徳・慣習などの総体としての文化を経験し獲得していくプロセスそのものである。

東南アジアは、その地理的環境や歴史的経緯の多様性を背景として形成されてきた多文化社会として知られている。多くの地域が16-17世紀以降に欧米列強諸国による植民地支配を経験し、20世紀中頃以降の独立と国民国家の模索を経て民主化を遂げてきた。欧米諸国の文化的影響を長期にわたって強く受けた地域もある。植民地支配や国家建設の中では、多くの地域で近代化が推進されてきた。そして世界の他地域と同様に、東南アジアにおいてもメディアの発展や情報のグローバル化の影響が顕著に見られる。このような変遷の中で文化をめぐる価値観は、国家統合の言説に方向づけられていた時を経て、人々の多様なアイデンティティが模索されていく方向へと向かいつつある。本書ではポピュラーカルチャーを対象として、こうした変化を描くことを目指した。

構成は序論に続く3つの部分から成る。序論では東南アジアのポピュラーカルチャーに関する諸課題をインドネシアの事例を通して検討し、総合的考察のための視点を提示した。

第1部「せめぎ合う価値観の中で」では、人々が多様な価値観と交渉しつつ自らの位置づけを模索し変化させていく状況を取り上げた。タイ映画、テレビドラマ、CMなどに見られる報恩の規範(平松秀樹)、シンガポールにおける政府と映画製作者間のせめぎ合い(盛田茂)、北タイ農村における文化実践(馬場雄司)、ベトナム映画界における新世代映画人の活躍(坂川直也)の各事例を通して、社会に根強く偏在する価値観、国家による規制、居住地域や世代による価値観の違いが、人々の行う文化表

現に与える影響を考察した。

第2部「メディアに描かれる自画像」では、メディア表現を通して模索される東南アジアの人々の自己表象を取り上げた。フィリピンの映画祭シネマラヤを通じた人々の自画像の変遷(鈴木勉)、インドネシア映画における宗教間結婚(小池誠)、フィリピンのゲイ・コメディ映画に投影される家族のあり方(山本博之)、インドネシアにおけるラジオとレコードの発展とともに形成された「近代」の概念(福岡正太)の各事例から、多様なメディアを通して自己を見出し模索していく人々の姿を描き出した。

第3部「近代化・グローバル化する社会における文化実践」では、近代化におけるメディアの発展や社会の変化、進みつつある情報のグローバル化によって、文化が地域的枠組みを越えて拡散する状況に着目し、人々の文化実践の多様化に焦点を当てた。ミャンマー歌謡のメディアを通じた発展(井上さゆり)、インドネシアのインディーズ・ロックの変容(金悠進)、タイにおける人形とそのイメージの流布による宗教のハイブリッド化(津村文彦)、タイとラオスにおけるモラム歌謡の流通と消費の還流(平田晶子)、インドネシアにおける野外映画上映の流行現象(竹下愛)の各事例を通して、近代化・グローバル化がもたらす文化の生産・流通・消費の多様なかたちを提示した。

以上の論考に加えて、各部のテーマをより補足するために多くのコラムを掲載した。共同研究のメンバーたちがフィールドで体験したユニークな現象や今後の研究のトピックを画像や資料を交えて簡潔に記述した。ジャカルタの音楽業界に精通した丸橋基による音源メディア販売店の訪問記も掲載した。

本書の記述を通して見えてくるものは、多様な価値観と向き合いつつ社会における自らの位置づけを模索し続ける東南アジアの人々の姿である。その姿からは、文化表現が社会の諸問題と決して無関係ではないことが示される。人々が日常的に経験する文化は、生活の中に深く入り込み価値観や思想に多大な影響を与え、社会における多様な論争に何らかの展望やカタルシスをもたらす。現代東南アジアのポピュラーカルチャーをめぐる研究は、文化の持つ力がどのように人々に社会にそして世界に影響を及ぼしていくのかという問題に一つの鮮明なイメージをもたらしてくれるであろう。

文 福岡まどか

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は民族音楽学、文化人類学、地域研究(インドネシア)。主な著書に『性を超えるダンサー ディディ・ニニ・トウォ』(めこん 2014年)、『ジャワの芸能ワヤン—その物語世界』(スタイルノート 2016年)、『インドネシア上演芸術の世界—伝統芸術からポピュラーカルチャーまで』(大阪大学出版会 2016年)。

